

『藤六集』試注（二）

文学研究科国文学専攻博士後期課程満期退学 深谷 秀樹

はじめに

本稿は、『藤六集』試注（一）（東洋大学大学院紀要第49集、二〇一三年三月）に引き続き、藤原輔相の家集『藤六集』の注釈を試みるものである。第二回に当たる本稿では、9番歌から16番歌までを扱う。凡例等は第一回に従うので、そちらを参照されたい。

9

【本文】

あしがなへ

つのかのなにはわたりにつくるたはあしかなへかとえこそみわかね

【他出】

拾遺集418・拾遺抄494

【語釈】

○あしがなへ 三本の足と二つの耳がある鍋・釜。和歌に詠まれることは稀である。数少ない和歌用例として、江戸後期の歌人、井上文雄による

果はただうきめをみつのあしかなへなにはのこともかくこそ有りけれ（調鶴集・845・詞書「仁和寺の僧の、かなへかづきたるかた」）

がある。この歌は、詞書にあるように、『徒然草』53段の挿話（仁和寺の法師が酒に酔い、興に乗じて足鼎を頭にかぶったまま抜けなくなり、騒動になったという話）に基づいている。

○つのかのなには 摂津の国、難波。現在の大阪市に当たる、淀川の河口付近を指す地名。海辺の湿地帯で蘆が生い茂る土地であったことから、難波と蘆とを組み合わせる歌に詠まれることが多い。11番歌にも「なにはえ（難波江）」が、やはり蘆と共に詠まれている。

つのかのなにはのあしのもはるにしげきわがこひ人しるら

めや（古今・恋二・604・貫之）

なにはがたかりつむあしのあしづつのひとへも君を我やへだつ
る（後撰・恋二・625・兼輔）

○あしかなへかと 蘆か苗かと。この部分に題の「あしがなへ」を
隠す。

○えこそみわかね 見分けることができない。副詞「え」は、打消
表現を伴って「……できない」の意を表す。難波は蘆が多く生えて
いるので、そこに田を作れば、蘆と稲の苗との見分けがつかない
というのである。

【通釈】

足鼎

摂津の国の難波の辺りに作る田は、蘆なのか苗なのか、見分けるこ
とができないものだ。

【評】

足鼎という、和歌では特殊な題を扱った物名歌である。このよう
な、調理道具や食器類を詠んだ歌は、『万葉集』卷十六の詠物歌（戯
笑歌の一種）にみえる、ながのいみきおきまろ長忌寸意吉麻呂の歌

さす鍋に湯沸かせ子どもいぢむつ櫛津の檜橋より来む狐に浴むさむ

（3824）

がある。この歌の左注によれば、宴席の折、人々が意吉麻呂に「こ

の饌具、雑器、狐の声、河の橋等の物に關けてただ歌を作れ」と言っ
て、その求めに応じて詠んだ歌であることがわかる。輔相の物名歌
にもこれらの詠物歌の影響があると考えられ、当該歌のほかにも、
『拾遺集』で輔相作とされる

あしひきの山のおちくちばいろのをしきぞあはれなり
ける（417）

には、「朽葉色の折敷」（折敷は食器を乗せる盆）が詠まれている。
食物の歌同様、宴席の場で詠まれる即興詠の一種とみることができ
よう（拙稿「拾遺集の物名歌と藤原輔相——食物を詠んだ歌をめぐつ
て——」『和歌文学研究』第86号 二〇〇三年六月 参照）。

10

【本文】

みづぐるまを

かたときにちぢの事のはかたらはばみつくるまにてあらじと思ふ

【他出】

なし

【語釈】

○みづぐるま 水の力で車を回転させ、その動力を利用するしくみ。
はやきせにたたぬばかりぞみづぐるまわれもうき世にめぐると

をしれ（金葉集二度本・雜上・561・行尊）

うぢがはのはやせにめぐるみづぐるまそらせよりうくるさみだ
れのころ（明日香井集〈雅經〉・34）

たちもあへずかはせにめぐるみづぐるまくむかずごとにやどる

月かな（為忠家後度百首・417）

○かたとき わずかな時間。

かた時も見ねばこひしき君をおきてあやしやいくよほかにねぬ
らん（後撰・恋二・677・藤原有文）

かた時もわすれやはせしつらかりしころのさらにたぐひなけ
れば（高光集・34）

○ちぢの事のはかたらはば 多くの言葉を語り続けるならば。

○みつくるま 「見付くる間」に題の「水車」を隠す。「見付く」は
見つける、見出す、認めるの意。

【通釈】

水車を（詠んだ歌）

わずかな時間に多くのことを語り合おうとすれば、（その言葉を）
認める間もないだろうと思う。

【評】

「水車」は、【語釈】に挙げた和歌用例のほか、『栄花物語』にも「車
輪燈には車の形を造り水ぐるまの形を造り」という用例があるが、

数としては少ない。それを物名歌の題に用いているところに、輔相
の独自性が表れているといえよう。

11

【本文】

つばいもも

なにはえはききもとむるになればやおほくのあしを人のかるらん
※歌の右に「いつかはこの哥につばいもある、かきたがへか」と
注記あり

【他出】

なし

【語釈】

○つばいもも モモの変種で、中国から日本やヨーロッパに伝わる。
果実は無毛でモモよりやや小さく黄赤色。「つばきもも」とも。『十
訓抄』に「高陽院の正親町殿の東向の御車寄に、大なるつばいもも
の木あり」とある。この歌の題となるはずであるが、歌と一致しな
い。【評】参照。

○なにはえ 難波江。摂津国の「難波」（9番歌参照）の海。左の
恵慶の歌以降、歌枕として著名である。「難波」は他に「難波津」「難
波潟」「難波の浦」などの形で詠まれる。

なにはえのあしのはなげのまじれるはつのがひのこまにや
あるらん（拾遺・雑下・537・恵慶）

はなならでをらまほしきはなにはえのあしのわかばにふれるし
らゆき（後拾遺・春上・49・範永）

なにはえのあしのわかねのしげければこころもゆかぬふなでを
ぞする（金葉集二度本・雑下・607・六条右大臣）

なお、平城京の時代には、単に「津」といえば「難波津」、「江」といえば「難波江（難波堀江）」を指していたという（瀧川政次郎氏「難波津と難波江」（『大阪府立図書館紀要』第9号 一九七三年三月 参照）。

○ききもとむる 「聞き求むる」で、聞いて求めるとなるが、後述のように「ききもとむる」であれば「木も求むる」となる。下句の「あし」との関連を考慮すれば、「木も求むる」としたほうが意味が通じやすい。

○あし 「難波」と「蘆」の関わりは9番歌参照。

【通釈】

つばい桃

難波の海（辺）では、木を求めることもないから、多くの蘆を人が刈っているのだろうか。

【評】

先に【語釈】で述べたように、この歌を物名歌と考えたときに、題と歌とが一致していない。そのため、歌の右肩に「いつかはこの歌につはいもある、かきたがへか」と注記されている。この注記は、転写が重ねられたいづれかの段階での書写者が疑問に思ったことを記したものだと思われる。この点について『山岸』は

こゝに一首と次の題とが脱落したのである。

と、もともと「つばいも」を詠み込んだ歌と、次の歌と題とが記されていたことを推測されている。そしてこの歌の本来の物名題については、

はやを（お）―早緒即ち「鱸につける縄」か「しお（を）ひ」かを詠んで居るらしい。

と推測されている。これに対し、山口博氏（『私家集大成』書籍版解題）は、

この歌の第一・二句は元来「なにはつはきも、とむるに」（難波津は木も求むるに）であつたのが誤写されて底本の形となつたと考えられる。

と述べられている。確かに、題の「つばいも」を「つばきも」のイ音便と捉え、かつ「難波江」を「難波津」とし、踊り字を「も」の後に移せば、この題を満たすことになる。この二点を、何度も転写を繰り返すうちに生じた誤写と考えれば不自然とは思われない。また、【語釈】で触れたように、第二句は原文の「ききもとむる」よりも「ききもとむる」とした方が意味が通じることからも、こ

は山口氏の仮説を採るのが妥当と思われる。よって、通釈では本文を校訂した上で訳をおこなった。

12

【本文】

うへのはかまをたたでえんといふ事を

すみよしのきしにおふてふわすれぐさうへのはかまはたたずてふなり

【他出】

なし

【語釈】

○うへのはかまをたたでえん この歌の題は、語句ではなく文を読み込むものとなっているが、実際には、「うへのはかまはたたず」という形で詠み込まれている。「うへのはかま」は、下の袴の上に付ける袴で、礼服等の装束に用いるもの。

○すみよし 撰津国。もとは「すみのえ」と称したが、これに「住吉」の字を当てたところから「すみよし」と呼ばれるようになったというのが定説である。これに対し、奥村恒哉氏（『歌枕』平凡社選書52 一九七七年四月）初出『国語国文』一九六六年五月）は、平安時代には両者が明白な区別のもとで用いられていたと主張され

るが、片桐洋一氏（『歌枕歌ことば辞典 増訂版』笠間書院一九九九年六月）初版 角川書店 一九八三年十二月）は、そこまでの明確な区別はできないと述べられている。

○わすれぐさ 忘れ草。「萱草」^{かんそう}の異名。「忘る」との掛詞として詠まれることが多い。

みちしらばつみにもゆかむすみのえの岸におふてふこひわすれぐさ（古今・墨滅歌・III・貫之）

住吉の岸におひたる忘草見ずやあらましこひはしぬとも（拾遺・恋四・888・詠み人しらず）

すみよしのこひわすれぐさたねたえてなきよにあへるわれぞかなしき（新古今・恋五・1420・元真）

○うへのはかまはたたずてふなり 「うへのはかま」は、ここでは植物の「苞」^{ほう}を指す。芽やつほみを覆って花を保護する役割を持つ。この苞が、茎のように伸びて立つことがということを表したもの。

【通釈】

上の袴を裁たずに手に入れようということを（詠んだ歌）
住吉の岸に生えるという忘れ草の、上の袴は立つことがないということだ。

【評】

長い文を題として詠み込んだ歌であるが、「上の袴を裁たずに手

に入れる」というのは解釈が難しい表現である。一種の謎かけのようなものであるうか。そのように仮定するならば、「上の袴を立たずに手に入れることはできるか」と問われた輔相が、住吉の忘れ草を引き合いに出して、「植物の『上の袴（苞）』であれば、芽などを覆っているばかりで、立つことはありませんよ」と答えたということが想定される。

13

【本文】

こがらす

とむれどもいろはこがらずみゆるかなわくらさきにあればなるべし

【他出】

なし

【語釈】

○こがらす 小さい鳥、または子供の鳥。「鳥」の用例は『万葉集』に用例が多くみられるが、「こがらす」の例はこの歌の他には見当らない。【評】参照。

○とむれども 本文のままでは意味が通じにくく、また、他の用例も見いだせない。色について詠んだ内容であることを考えると、『山

岸』が「そむれども（染むれども）」と校訂しているのが妥当であろう。

○いろはこがらず 色は濃からず（濃くない）。「こがらず」の部分に「こがらす」を隠している。

○わかむらさき 若紫。淡い紫色をさす。そのため「濃からず」というのである。

【通釈】

小鳥

染めていても、色は濃くないように見えることだ。（それは、この色が）きつと若紫だからなのであろう。

【評】

「小鳥」を「濃からず」の部分に隠したもの。物名としては詠み込み方が単純であり、一般の掛詞と相違ないような形となっている。

なお、『万葉集』において鳥を詠んだ歌には、

鳥とふ大をそ鳥の真実にも来まさぬ君を児ろ来とぞ鳴く（巻

14・3521・東歌）

のように、鳥の鳴き声「コロク」を「児ろ来」（娘が来る）と聞きなす諧謔的な歌や、

婆羅門の作れる小田を喫む鳥 瞼腫れて幡幢にをり（巻16・

3856・高宮王）

のように、「数種の物」を即興的に詠み込む詠物歌の中で詠まれるなど、遊戯的な歌で用いられるという特徴がある（大久保廣行氏「鳥の話」『東洋』二〇〇四年一二月 参照）。平安時代において、和歌はもちろんのこと、文学作品自体に登場することすら稀であった烏を、輔相が物名の題に用いているのは、右の『万葉集』の影響が少なからずあったものと考えてよいであろう。

14

【本文】

みづふぶき

かがみみつふぶきにかみはなりにけりおいにはとりのねこそなかるれ

【他出】

なし

【語釈】

○みづふぶき 水蔭。芡。「鬼蓮」^{おにばす}の異名。この歌以外に和歌用例は見あたらない。

○かがみみつ 鏡見つ。鏡を見た。

○ふぶきにかみはなりにけり 吹雪に髪は成りにけり。吹雪は雪が強い風に吹かれることである。それを髪の毛に見立てていることか

ら、髪の毛がすっかり白髪になって乱れているようすを表したものである。

○おいにはとりのねこそなかるれ 老いた身には、鳥の鳴き声も、泣いているように聞こえることだなあ。「鳴き声」と「泣き声」を掛け、老いの悲しみを鳥の鳴き声に託している。

【通釈】

水蔭

鏡を見た。（私の）髪はまるで吹雪が吹いたように、真っ白に乱れている。老い（たわが身）には、鳥が鳴いている声も、（悲しくて）泣いているように聞こえることであるなあ。

【評】

老いの悲しみを詠んだ内容の歌となっている。髪の毛が吹雪のようになるという表現は、源順にも

君きかばなけほととぎすくろかみのふぶきになれる我もおとら
で（順集・244）

という歌がある。この歌もホトトギスが鳴くことを詠んでおり、当該歌と似た趣向となっている。

【本文】

きじのをどり

かはぎしのをどりとるべきところあらばうきよにすまでみやなげたまし

※歌の上部に「拾」と集付あり

※「すまで」の右に「まどふイ」と傍注あり

【他出】

拾遺集401（第四句「うきにしにせぬ」、第五句「みはなげてまし」）

【語釈】

○きじのをどり 雉の雄鳥。単に「きじ」とせず、「をどり」を付け加えることで題を長くしている。物名歌では、題の字数が多くなるほど詠み込むのが難しくなり、それを不自然のないように詠み込むために、詠み手の技術が求められた（拙稿「物名の和歌——古今集・拾遺集を中心に——」『日本文学文化』第2号 二〇〇二年六月 参照）。同様の例として、『拾遺集』物名部で輔相の作とされている「あらふねのみやしる（荒船の御社）」（384）や「くちばいろのおしき（朽葉色の折敷）」（417）がある。

○かはぎしのをどりとるべきところあらば 川岸に、飛び降りることができ場所があったとしたら。仮定表現。

○うきよにすまで この辛い世の中に住まないで（生きながらえないで）。底本には「すまで」の部分に「まどふ」と他本との校異が注記されている。この場合「辛い世に迷う（身）」の意となる。また『拾遺集』では「うきにしにせぬ（憂きに死にせぬ）」とある。この本文では、「辛い世の中に暮らしながらも死なない（身）」の意となる。

○みやなげてまし 身を投げていただろうに。上句の仮定表現と合わせて、反実仮想の表現が用いられている。「身を投ぐ」は、身を投げて命を断つこと。

世中のうきたびごとに身をなげばふかき谷こそあさくなりなめ

（古今・誹諧歌・1061・詠み人しらず）

おなじくは君とならびの池にこそ身をなげつとも人にきかせめ
（後撰・恋四・855・詠み人しらず）

【通釈】

雉の雄鳥

川岸に飛び降りることができ場所があったとしたら、（この）辛い世の中に暮らすことなく身を投げてしまったであろうに。

【評】

「憂き世」にありながら、死なずに生きながらえるということとは、一つの典型的表現として用いられており、『古今集』には次のよう

な用例がある。

身をうしと思ふにきえぬ物なればかくてもへぬるよにこそ有り
けれ（古今・恋五・806・よみ人しらず）

当該歌の場合は、憂き世に苦しみながらも死ぬことができない心境を、「もし身を投げることでできる場所があったらば」と表現している。すなわち、現実にはそのような場所はないということであり、死なないことの要因を外部の環境に求めたような内容の歌になっているのである。

16

【本文】

おしあゆ

たかのゑになにをかましかまへつるおしあゆがすなねずみとるべく

【他出】

拾遺集410、初句／三句「はしたかのをきゑにせんとかまへたる」

【語釈】

○おしあゆ 塩漬けにした鮎。食物を題材とした物名歌のひとつである。なお本家集では、末尾の39番歌でも「おしあゆ」を詠んでいる。

○たかのゑ 鷹の餌。

○かはまし 飼はまし。飼えばいいだろうか。

○かまへつる 構えてある。用意してある。

○おし 鼠を捕る罫。てこなどの仕掛けで、重しによって鼠を捕まえる。

○あゆがす 揺らす。仕掛けてある鼠捕りを揺らすな、動かすな
意。

○ねずみとるべく 鼠を捕るために罫を仕掛けているのだから
意。

【通釈】

おしあゆ

鷹の餌に、何を飼ったらいだろうか。（用意してある）罫を揺らすな、（それで）鼠を捕ろうとしているのだから。

【評】

鷹の餌にするために鼠を捕まえるという、一般的な和歌とはおよそかけ離れた内容の歌となっている。物名歌という制約はあれ、このような歌を詠むところに輔相の特異性が表れているといえよう。同様に、鼠を詠んだ物名歌としては、『拾遺集』で輔相作とされている次の歌がある。

年をへて君をのみこそねずみつれことはらにやはこをばうむべ

き(421・詞書「ねずみの、ことのはらに、こをうみたるを」)

なお、『拾遺集』では上句の部分が「はしたかのをきゑにせんとかまへたる」となっている。既に毘まで仕掛けて鼠を捕ろうとしていることを考えれば、「なにをかはまし」と迷いの思いが窺われる『藤六集』の本文よりも、「をきゑにせん」と明確に意志を表した『拾遺集』の表現のほうが、意味は取りやすいと思われる。

Notes on “Toroku-Shu” (2)

FUKAYA, Hideki

FUJIWARA Sukemi is a tanka poet on the Heian Era. He was good at compose the “Mononona-Uta” [物名歌]. His tanka poems are collected on “Toroku-Shu” .

This paper puts an interpretation on Sukemi’s 39 tanka poems in “Toroku-Shu” , from No9 to No16 tanka poems are taken up this time.